

立命館大学 経営学部

経営学部では「グローバル・アントレプレナーシップ教育」をキーワードに、アジアと世界をつなぐ教学を展開。アイデアをビジネスとして形にする人、社会の諸問題を経営学の観点から解決する人など、社会に革新をもたらす力を備えた人材を育成します。



■大学生
中谷圭太さん



■先生
善本哲夫先生



■卒業生
江畑惟さん

CONTENTS

- プロフィール
- 5年後に向けて
- 大学生活について
- 高校生へのアドバイス
- 就職活動、仕事について
- 大学構内のお気に入りのスポット

●プロフィール

2015年度からキャンパスが移転しますが、経営学部の新しいコンセプトは？



■先生

経営学部は4月に開設する大阪いばらきキャンパス（OIC）で新たに前進していくことになります。「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」がキャンパスコンセプトですから、経営学部の学びもそれに伴い、大学の中だけでなく社会においても境界を設けず、学生たちが積極的に外に飛び出て見識を広められるプログラムをどんどん実施していこうと考えています。

■卒業生

“外に飛び出す”という点では、これまで僕たちがびわこ・くさつキャンパス（BKC）で実践してきた経営学部の流れは受け継がれるわけですね。

■先生

その通り。立命館大学の経営学部は、座学の授業や講座にとどまらず、積極的に外に出てフィールドワークを実施したり、各企業の工場施設を見学したり、さらに地方・地域産業の現場にも足を運び、学生自ら“学びの幅”を広げてきました。そうした世の中の“現実”を肌身で体験するプログラムは本学部ならではの大きな魅力ですし、OICに移転してもそうした面を受け継ぎながら新しいステップに進んでいきます。

■卒業生

特に善本先生のゼミは“外に出て現場を体験する”ことが研究の柱なので、私も在学時代は本当によく工場見学に足を運びました。

江畑さんは現在どういったお仕事をされていますか？

■卒業生

スポーツ用品メーカーのミズノ株式会社に就職し、ウェアの生産管理をしています。仕入れ先となる工場とやり取りし、納期や品質を管理するのが主な仕事です。日本国内が中心ですが、中国・インドネシア・ベトナム・タイなど、東南アジアの工場とやりとりすることもあります。

■先生

江畑さんは私のゼミで産業用ロボットを研究していましたから、大学時代に体験したことを活かしながら仕事ができている点もあると思いますよ。

中谷さんも善本先生のゼミで学ばれているのですか？

■大学生

はい。経営学部で先生のゼミに入り、江畑さんと同じく積極的に外に飛び出し、フィールドワークや地域おこしの現場をたくさん体験しました。

■先生

中谷くんは私がゼミで企画したプロジェクトに“皆勤賞”と言えるくらい、ほとんど参加していたね。

■大学生

先生から「兵庫県の丹波に行くぞ！」って声を掛けられ、その3日後には現地に入っていたこともありました（笑）。

先生が研究されている専門分野を教えてください。

■先生

研究のターゲットはいくつか持っているのですが、まとめて「技術管理」が研究のキーワードになるでしょうか。「技術管理」の中でも2つの大きなテーマ設定があります。

1つは「生産管理」です。工場の生産性を上げるためにはどうすればいいか、そこで仕事をする人がより働きやすくなるにはどういった環境が必要なのか、“工場の中の技術”という視点で研究しています。

そして、もう1つは「イノベーション」です。現在の科学技術が世の中の役に立つようにするにはどうすればいいか、その使いこなしの方法であったり、さらに、そこに新しい意味を持たせるなど、いわば“人工物の可能性”という視点で様々な取り組みを産学連携で行っています。

●大学生活について

入学後、印象に残っている授業はありますか？



■卒業生

先ほどもお話ししましたが、善本先生のゼミは“外に出る・外で体験する”ことで学びを深めていきますので、本当にたくさんの工場見学を経験できたことはとても印象に残っています。ビール工場やアパレル工場、電機メーカーの製造現場、あとは造船会社も行きまし、鉄鋼会社にも行きました。

■大学生

僕も江畑さんと同じです。工場見学以外では、地域おこしの現場を見に行き、地場産業のお手伝いをしたこともありました。新しくキャンパスができる大阪の茨木市で取り組んだフィールドワークも楽しかったです。

■卒業生

そこではどのようなフィールドワークを？

■大学生

新キャンパスの近くに高速道路があり、その高架下をどう活用すればいいのかをテーマにフィールドワークを行いました。高架下って「暗い」「危ない」というイメージがありますが、そうした印象をなくすための方法、さらに、明るく前向きに地元の人が活用できる方法を産学連携でアイデアを出し合いながら調査し、プレゼンテーションも行いました。

■先生

他には「子どもたちの居場所をつくる」ことをテーマにしたワークショップなどもやったけど、中谷

くんも参加していたかな？

■大学生

はい、覚えています。まずフィールドワークから始めましたね。子どもたちにとって「街」とは、一体どこが安全でどこが危険なのか、そうしたことを調べるために学生たちがカメラを持って“子どもの目線”で街の中を歩き回りました。

■先生

ワークショップは、彼らのフィールドワークをもとに後日実施しました。最近“街づくり”が盛んに提唱されていますが、一方で中心市街では子どもたちの遊ぶ場所が少なくなっている現実があります。こうした問題を解決するために、社会技術や科学技術が地域づくりにどう役立つのか、また企業が関わった場合その対価はどうなるのか、そうした道筋をみんなで考察しました。

さらに、私たちのゼミと交流の深い情報理工学部の音響工学研究室にも協力していただき、新しい試みも行いました。量販店で普通に購入できるものから特殊なものまで多種多様なスピーカーを用意し、“音”環境を取り入れることで、子どもたちの居場所づくりにどのような効果がもたらされるのかを検証しました。

“外で体験した”ことはレポートにまとめたりするのですか？

■大学生

レポートの提出課題はなかったような…。

■卒業生

基本的に“体感型”のゼミですから、私の時もなかったですね。

■先生

私のゼミではそうした課題は出していないですね。もちろん意図があつてのことで、見学などの実習を終えた段階でその都度レポートにまとめてしまうと、そこで“一区切り”つけることになるんです。ゼミで外に出る機会をたくさん設けているのは、学生たちにそれらの「連続性」を体験してもらいたいからです。まったく分野が違う工場でも、実はどこかで何かがつながっていたりします。学生たちにはそこをしっかりと感じてもらいたい。ですから、その都度のレポートは課さず、研究したことの集大成は卒業論文でまとめれば良いと考えています。

ということで、今日は久しぶりに江畑さんが来てくれたので、彼女が大学時代に書いた論文を持ってきました。

■卒業生

わっ！ そんな古いものをよく残されていましたね！

■先生

「日本産業資本における育成思想の現代的意義」。素晴らしいテーマです。覚えてる？

■卒業生

もう忘れていきますよ！ 恥ずかしい！ でも当時の自分が何を書いたのか興味があるので、後でゆっくり見せてください（笑）。

お二人が立命館大学の経営学部を志したきっかけは？

■大学生

僕はもともと経営ではなく流通や交通に興味がありました。そこで色々と考えているうちに流通は経営学部でも学べるのではと思いました。高校時代は理数クラスでしたが、経営学部ならマーケティングといった理系の要素も学べるだろうし、人とのコミュニケーションを通して何かを考えることにも興味があったので、経営学部なら楽しく勉強できるだろうと思い志望しました。

■卒業生

私も高校時代は理系でした。確か高3の時だったかな、進路を考えている時に担任の先生から「キミは研究室に入って1つのことに向き合うタイプではない」みたいなことを言われて、「えっ!？」と思ったのを今でも覚えています（笑）。



■先生

はははは！

■卒業生

今振り返ると、自分の人柄を活かして色々なことを勉強するほうが向いているという助言だったと思いますが、当時はちょっとショックを受けながらも、「じゃあ幅広く学ぶならどこだろう？」「経営学部かな？」「やりたいことは何でもできそう！」という感じで学部を決めました。

■先生

確かに自由に学べるよさはあるよね。もちろん経営学部ですから、税理士や公認会計士といった仕事に就くためのプログラムも用意されていますが、だからといって本学部の学生全員がそちらの勉強に力を入れないといけないわけではありません。入学後、幅広く授業を受けていく中で自分の興味が見つかればそれを自由に研究していくことができます。“選択の幅”を広げられるプログラムは、私のゼミだけでなく、経営学部全体としてカリキュラムされています。多様性の中で「経営学」という1つの学びの柱がきちんと立脚しているのが本学部の特長であり魅力でしょう。

●就職活動、仕事について

卒業生はどういった分野で活躍されていますか？

■先生

いわゆる大手企業に就職する人は大勢いますが、私のゼミの出身では米農家になった人がいますよ。

■卒業生

確か福井県に行きましたよね？

■先生

そう。池田町という人口 3,200 人くらいの小さい町で、今は無農薬の有機米を作っています。在学時代、彼は地域おこしの産業や農業について研究していました。就職活動では一般の企業をまわって 3 社から内定をもらっていましたが、迷いに迷い、最終的にはそれらを断って福井県で農業の職に就きました。

■卒業生

縁もゆかりもない土地で地元の人に受け入れてもらうのは、結構大変だったのではないのでしょうか？

■先生

I ターンやU ターンとして地元も若者を積極的に受け入れようとしています。根付かずに去っていく人も多いようです。彼はI ターンですが、最初はすぐに辞めるだろうと思われていました。でも頑張って、3 年を経て、やっと地元の人に認められるまでになり、日経などのメディアからの取材もあったようです。今では 2km にわたる広範囲の田んぼを任せられ、最近では結婚もし、地域のI ターン組の青年団長もやっています。本当に素晴らしいことです。

他にはどういった方がいらっしゃいますか？

■先生

個人事業主になって兵庫県の丹波で地域おこしの仕事に携わっている人もいます。

■大学生

具体的に何をされていますか？

■先生

木酢液や黒豆といった丹波の地域産業の現場に関わり、その活性化に向けた取り組みをI ターン・U ターンの青年団や役場の人と一緒に行っています。彼は学部を卒業した後、立命館大学 経営管理研究科（経営大学院）に進み、MBA（Master of Business Administration）を取得しました。そのまま企業への就職も考えたようですが、在学時に学んだことを活かして活躍したいという気持ちが強く、地域産業の活性化に貢献できる仕事を選びました。

彼のことは私もずっと見てきて、その行動力はとても評価していますので、再び大学に戻って博

士課程で学ぶことを勧めました。2014 年の 4 月以降は“二足のわらじ”で大学院と丹波を行き来しながら「地域活性化と伝統産業」の枠組みについて研究しています。

■大学生

すごい方ですね！

■卒業生

私のまわりでは銀行に就職した人もいます。地元の金融機関に勤めています。

江畑さんがスポーツ用品メーカーを就職先に選んだ理由は？

■卒業生

もともとメーカー志望で、その中でも生活に密着した商品づくりをしている企業に興味がありました。就職活動を始めた当初は主に菓子メーカーや玩具メーカーをまわっていましたが、ある先輩から「興味の無いメーカーを見ておくのも大事だよ」とアドバイスをいただきました。確かに、自分の可能性を広げる意味で色々まわっておくのもよいと思い今の会社を受けました。

■大学生

面接ではどんなことを聞かれましたか？

■卒業生

1 次面接で生産管理の質問を受けましたが、それが結構難しかった記憶があります。「キミだったら、うちの会社の工場のどの工程を改善して生産効率を上げる？」というようなことを聞かれ、「ミズノの工場のことなんてまだ全く知らないのに、どう答えればいいのか！」と思いました。でもとっさに工場のレイアウトや工程などを仮定し、自分でシミュレーションして答えました。この時は大学時代の工場見学の体験が活かされたと感じました。

中谷さんはこういった分野に就職されますか？



■大学生

ベンチャー系の不動産会社に内定が決まっています。経営のベースは中古物件を買い、それをリフォームし、手頃な値段で家を探している人にセールスすることです。近い将来 IPO (Initial Public Offering) で株式公開を行う予定もあり、様々な地域でのオフィス展開も考えていますから、これから面白くなる会社だと思っています。

■卒業生

就職活動ではたくさん会社をまわったの？

■大学生

それほどでもないです。正式にエントリーしたのは10社いかないくらいです。

面接ではどういったことをアピールされましたか？

■大学生

ゼミで学んだことだけでなく大学時代に取り組んだ活動もアピールしました。具体的には新入生の学びや生活をサポートする「オリター」をしていましたので、そこで体験できたこともアピールしました。

■先生

中谷くんのよさは、やはり好奇心が旺盛で行動力があるところでしょう。オリターの活動は人に対する興味がないとできません。最初に言いましたが、彼はゼミで実施した工場見学などにはほとんど参加していましたし、その行動力は本当に大したものですよ。入学当初からアントレプレナー（イノベーションを企てようとする者）に関する学びにも興味を持っていたので、ベンチャー系の不動産会社に就職を決めたのも終始一貫していると思います。

● 5年後に向けて

近い将来、やりたいことや夢はありますか？

■大学生

春からはよいよ会社での生活が始まります。最初はおそらく営業を経験することになるでしょうから、早く仕事を覚え、自分の力をつけていき、さらに自分の力を見せていくことが重要だと思っています。その後の目標は、いつか人事の仕事に取り組みたい気持ちはあります。

■卒業生

人事の仕事のこういったところに魅力を？

■大学生

大学時代のオリターの活動もそうでしたが、僕は人がリアクションを返してくれた時がすごく嬉しいんです。そう考えると、会社で一緒に時間を過ごす同僚や先輩、後輩たちに対して、「この人はどうすれば喜んでくれるのだろう？」「どうすれば幸せになれるんだろう？」と考え、社員に合った環境や制度を作ったり、新入社員の教育や配属をサポートしてあげることができれば仕事上のギャップをなくせると思います。もちろん僕自身も幸せを感じることができそうですし、結果的に会社への貢献にもつながるだろうと考えています。

■先生

江畑さんはそういった将来的な仕事の希望は？

■卒業生

私は今の部署でやり切れていないことがたくさんあると感じていますから、現時点では異動や転職希望はありません。入社して丸3年、ずっと同じ生産管理の仕事に携わっていますが、本当にまだまだ勉強不足です。

細かい話をすれば、ウエアを作る際、生地はどこを裁断し、どう縫い上げればより無駄のない商品づくりにつながるのか、そういったことをもっと理解しながら工場に指示を出さないといけませんが、そこまで至らずで…。ただ、ゆくゆくは会社になく大きく貢献できる人間になりたいので、自分が成長していくためにも、いつか他の部署で経験を積むことも必要だと感じています。

■先生

異動の希望を出せば叶いやすいの？

■卒業生

うちの会社は手を挙げれば結構異動できますね。海外に行きたいと言い続け、それが叶った人を何人も知っています。もしかして、私もそろそろ手を挙げたほうがいいのでしょうか（笑）。

先生はこれからどういったことを？



■先生

既に始動しているプロジェクトの話になりますが、新しいキャンパスのOICでは産学連携の取り組みの1つとして地ビールを作り、提供していくことが決まっています。通常、地ビールと聞くと、その土地でビールを醸造するイメージが浮かぶでしょう。けれども、私たちが作る地ビールはキャンパスがある茨木で作るわけではありません。地元で収穫され

た作物などを使うわけでもありません。でも“地ビール”なんです。

どういうことかと言いますと、ここでチャレンジしようとしているのは“意味を変える”試みです。どこで作ろうが、地産のものを使っていなくても、本学部の学生たちが熱意を持って企画し、“地域に愛される”存在になれば、それを“地ビール”と呼んでもいいじゃないかという考え方です。

■大学生

ある意味“革命”ですね。

■先生

その通り。まさに既存の枠にとらわれない試みです。最初に私の研究分野をお話しした際、「イノベーション」と言いましたが、この試みは“意味を変えるイノベーション”です。そして同時に、こうした取り組みが地域の活性化につながるツールになり得ることも期待しています。

私たちは学生とともに「デザイン科学」を研究するプロジェクトを立ち上げています。簡単に言えば、“人間中心の発想”から人工物（モノ・サービス）を創造し、そのことを通じて豊かな生活時空間を実現するための新たな“ものづくり”の方法論や手段について研究しています。今後、経営学部の学

びのあり方として、学生が中心になり、産学連携で、さらに地元の人も一緒になって取り組む“ものづくり”のプロジェクトも増えていくでしょう。その一員として私も研究者の立場で、また学生たちを導く立場で、様々なことに挑戦していきたいと考えています。

●高校生へのアドバイス

最後に高校生にアドバイスをお願いします。

■卒業生

京都市出身の私にとって立命館大学の存在はすごく身近で、それが進路を決めた理由の1つでもありました。でも、そのことが私の中で選択肢を少し狭めていたような気がします。

もちろん志望した通り経営学部に入學でき、自分が興味を持ったことを学べ、望んだ会社に就職できましたから、結果的には最高によかったのですが、もし高校時代にもっと多くの選択肢があるという意識があったなら、幅広い可能性を追求できたのかもしれない。

■大学生

僕は福岡の出身ですので、立命館大学への入學を機に九州を離れました。知らない土地に住み、知らない人に囲まれながら大学生活をスタートしましたが、それは自分の中ですごくいい経験になりました。

■卒業生

ちょっと勇気を出し、自分の中で選択肢の限定をせず、例えば本当にやりたいことがあるのなら、思い切って海外の大学に目を向けるのもいいかもしれません。とにかくたくさんの大学や学部を調べて、自分に合うと思ったところがあれば積極的にチャレンジしてほしいです。実は私も“ちょっとだけ”勇気を出して京都を出たのですが、それが実家から通える隣の滋賀県、経営学部のある「びわこ・くさつキャンパス」でした（笑）。



■先生

はははは！

■大学生

僕も江畑さんと同じで、高校時代にできるだけ視野を広げておくのはいいと思います。高校の時に“高校以外のところ”に行ったりするのは勉強や部活などで忙しいと結構難しいかもしれませんが、少しでも可能なら色々な世界を見ておくときっと視野は広がるでしょう。

先生からはいかがでしょう？

■先生

高校生は基本的には3つの場所で日常生活を送っていると思います。学校のクラス、部活、そして家。あとプラスするなら塾とかかな。そしてもちろん、そこにはそれぞれの世界があります。ただ、その世界の中で物事を完結してしまうと視野が閉ざされてしまいます。それではあまりにももったいない。例えば学校に通う時でも、ぼんやり通学しているだけでは何も発見できません。しかし、「何か面白いものはないか?」「自分から見つけてやろう!」と興味のアンテナを立てながら通学すると、今まで気づかなかった何かを発見できる可能性は大きく広がります。

■卒業生

おっしゃる通りだと思います。

■先生

ですから、日常生活の中で現実を面白いと思える感性を高校時代からぜひ磨いてください。大学に入るとそうした感性が活きてくる機会はたくさんあります。

経営学部の学びは“現実を学ぶ”ことです。さらに言うなら、経営学の理論は“現実”です。つまり現実の中に理論が潜んでいますので、経営学部への進学を希望する人は、入学後に理論を学ぶにあたって、高校時代からぜひ「現実の面白さ」に興味を持っておいてほしいと思います。

●大学のアピールポイント

今度の新しいキャンパスで面白いスポットはありますか？

■先生

「研究フロア」はきっと楽しい場所になるよ。吊り下げ式の“揺れるイス”があるからね。

■卒業生

揺れるイス？ それって以前先生がフロアの構想段階で言っていたブランコのことでしょ？

■先生

いえいえ、“揺れるイス”です。経営学部の棟には2つの研究フロアがありますが、そのうちの1つに「産学連携の庭」が設けられ、企業から訪れてくださった方、私たち教員、さらに学生たちも一緒になって、新しいアイデアを出し合いながらディスカッションする場になります。

■大学生

フロアのコネプトは何ですか？

■先生

“オープンな秘密基地”です。内装を担当したメーカーのデザイナーさんに「意味がわからない…」と言われてましたが。

■大学生

そりゃ言われますよ（笑）。

■先生

要するに地域活性につながる“新しいものづくり”についてみんなで考える空間ですから、「外の人がもう一度来たくなる場所とは？」といった視点で考えました。ですから「遊び」の要素は必要だと感じてブランコを…。

■卒業生

やっぱりブランコじゃないですか！



■先生

あっ、間違えた…。ええっと、その、“揺れるイス”の設置にもこだわり、他にはビーチパラソルやデッキチェア、櫓（やぐら）なども置いてあります。

「遊び」とは自在性ですから、その活動に決められた定義や意味はありません。でも、意味を持たせて遊ぶのは人間です。この空間で遊び心をもってあれこれ考え、「みんなで新たな意味を創造するものづくりをしよう」ということです。

■卒業生

私も一度遊びに行きたいです。これから経営学部に入ってくる人にとっては楽しみながら学べる空間ですね！

●インタビューに答えてくれた方々



■先生

善本哲夫先生

立命館大学経営学部 教授

京都府立西舞鶴高等学校出身。同志社大学商学部卒業、同大学院商学研究科博士課程退学。東京大学 21 世紀 COE ものづくり経営研究センター特任助手、同志社大学商学部講師、立命館大学経営学部准教授を経て現職。文部科学省グローバルアントレプレナー育成促進事業 立命館大学イノベーション・アーキテクト養成プログラム 副総括責任者、内閣府 SIP（革新的設計生産）サブ・プログラムディレクターなどの職務も兼務。



■卒業生

江畑惟さん

ミズノ株式会社 グローバルアパレルプロダクト本部勤務

京都府立山城高等学校出身。立命館大学経営学部経営学科卒業、同大学大学院経営学研究科修士課程修了。大学時代は産業用ロボットの研究に取り組む。現在、ミズノ株式会社 グローバルアパレルプロダクト本部の生産・品質管理部にてウェアの納期・品質管理の仕事に従事。主に国内を中心に東南アジアの工場を担当。



■大学生

中谷圭太さん

立命館大学経営学部経営学科 4 年生（2014 年度取材当時）

福岡県立修猷館高等学校出身。大学入学後、マーケティングやアントレプレナーシップ論、産学連携のプロジェクトなどに興味を持つ。善本ゼミでは積極的に外に飛び出し、工場や地方・地域産業の現場を見学・体験し、数々のフィールドワークも実施。卒業後はベンチャー系の不動産会社に就職予定。